



随筆

中心と周縁

—オセアニア再評価のために—

山口 修*

文化の場合

人間はただ動物として食と性の生活を営んで生存するだけでは満足しない。そしておそらく動物といえどもこれらの基本的な欲求を満たすだけの生活を営んでいるわけではないだろう。そこには、いわば「遊び」の側面、いってみれば生きるためには不必要な無駄な行動が観察されるに違いない。試みに動物園を訪れるがよい。そしてまた、ペットを飼育してみるがよい。自然の状態から隔離されて、ある意味では人為的に人間に近づけられているとはいえ、人間が目撃できる動物の生活の中には十分に「文化的」な側面が備わっている。ましてや、人間は他の動物以上に生活の局面を多様化させその運用に心を奪われているのであるから、まさに「より文化的な」存在であるといえるだろう。

ただ単に生きるためだけの目的には「音楽」は全く必要ではない。それなのに、なぜ人は汗を流してピアノに向かい、顎の筋肉を変形させてまでヴァイオリンをひくのか。そして、なぜ丸太ん棒をわざわざかついできて加工をこらし打ち鳴らすのか。この質問に対する答は1つしかない。すなわち、人間は「文化」を求めているからなのである。しかも、動物が若干呈示しているかもしれない「文化的」行動よりももっと積極的な衝動——それを知性プラス感性といってよいだろう——でもって裏付けながら。

道具を工夫して作りあげ何らかの自然のために供する物質文化、道具や身体を駆使して人為的な現象を産み出す事象文化、そしてそれらを支える精神文化、いずれをとってみても人間は他の動物を凌駕している。

しかしここで1つ注意しなければならないのは、動物が種によって異なる行動の体系（ないしパターン）を示すのと同じように、あるいはそれ以上に、人間の民族毎に異なる文化を形成してきたということである。音楽はその最もわかりやすい例を示してくれる。ピッチの高低の違いを合理的な縦横の関係に組み込んだヨーロッパ音楽、身体の運動と直結した形でリズムが層を成して絡み合うアフリカ音楽、そして微妙な音のゆれや音色の変化によってマイクロコスモスをつくりあげるアジア音楽——これらはそれぞれの地域の1つの典型にすぎず実際にはもっとももっと多様である。こうした世界中のさまざまな音楽の中でヨーロッパ音楽は確かに特異な存在ではある。しかし、これが世界の音楽の中心であり続けることはないだろう。周縁に置かれて、いわば忘れられていた諸々の音楽が見直されるようになってきている。

しょせん文化の場合、中心と周縁の問題は相対的な類のものである。極端に言えば文化事象のどこにでも中心を移動していくことができ、その中心の移動に応じて周縁事象がかわっていくのである。ふたたび音楽を例にとろう。日本には日本の伝統音楽がある——その多くが外国の起源ないし影響によっているとはいえ、その伝統音楽が日本人にとって中心的であったことはいうまでもない。少なくとも幕末までは、だが明治維新とともに中心の急激な移動がなされることになった。そして近代化の道を進むという目的設定に、文化の一項目としての音楽までまきこまれてしまい、学校教育や実生活の場で現実に中心の移動が進行していったのである。

もちろん、ヨーロッパ文化を指向してきたことは悪い結果ばかりをもたらしたわけではない。ヨーロッパという異民族の文化と社会を理解しよう努めることを百年余の歳月をかけて実

*山口修 (Osamu YAMAGUCHI), 大阪大学, 文学部, 美学科, 音楽学講座, 助教授, M. A. 民族音楽学

賤してきた日本は、欧米がいずれ行きづまるであろうことを身をもって感知できるのである。そして中心の移動がこれからふたたび大規模に進行しようとしている。その中心は、欧米でもなければ日本でもなく、他のAA諸国とオセアニアということになるだろう。かれらの文化をゆっくりと着実に学んでいけば、いま先進国が失いつつあるものを取りもどすことができるかもしれない。中心の移動は全体主義的に国をあげてなされるよりも、さまざまな集団がそれぞれの関心と利害関係に応じてさまざまな方向にもっていかれる方がよいかもしれない。従来最も周縁的であった地域、たとえばオセアニアは、その中でも重要な一方向となるだろう。

技術の場合

価値の相対主義はこれまで述べたような文化の問題にしかあてはまらないのだろうか。さまざまなテクノロジーの形態に優劣の差が明らかに見られるとしても、即座に価値的に劣るものをすててしまい、優れたものへ優れたものへと向かっていくいわば絶対主義的な立場ははたして適切なのだろうか。

私自身が漠然と感じているのは、技術の分野でも文化の場合と同じように価値上の相対主義が唱えられるべきであろうということである。つまり、エレクトロニクスの極みを尽しつつある機械文明が人類の目指す技術の中心であるとすれば、周縁に位置づけられることになる伝統的な技術の世界もまた価値の上では何ら軽視される必要がないどころか、むしろ視点の中心を移動することによって、かえって重要な意味をもつこともあり得るのではないだろうか。

AA諸国やオセアニアの伝統的技術の体系に率直に目を向けるとき、それがまさに文化の体系に組み込まれていることに気がつくだろう。技術は伝統的社会にあっては、いわば無駄の世界すなわち文化にもその効用性を発揮しているが、その技術たるや、幼稚なものから高度なものに至るまで差別なく適当に選ばれて利用されているように思われる。そのよい例が伝統楽器の製作技術である。単に発音可能な物体をひろってくるだけで製作上ほとんど技術を必要とし

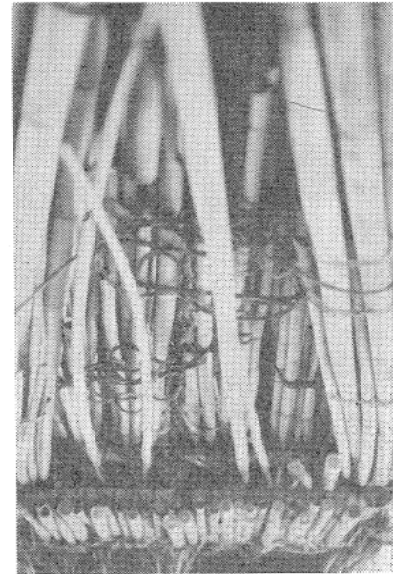


写真1 伝統的技術による筏の一部。フィジー博物館にて。



写真2 手遊びとわらべうたに興じるフィジーの子どもたち。

ないものから、材料選択・採伐・切断等々の過程を通して相当の技術を駆使するものに至るまで実にさまざまであるが、それらはどれが高級かなどとは区別されない。

さて、それでは伝統的技術にもどるといふ姿勢だけでよいのだろうか。現に機械文明の洗礼を受けてしまった諸民族が誘惑にかられて伝統から離れ新しいものに乗りにかえていこうとする数々の事例を見るにつけ、伝統技術と機械文明の何らかの融合が考えられなければならないように思われる。しかも、地域や民族毎に少しずつ違った形でなされるべきであろう。

オセアニアについてはまさにこのような問題が論議されていることが雑誌などからうかがえる。ここに1つの例を紹介しよう。太平洋諸島

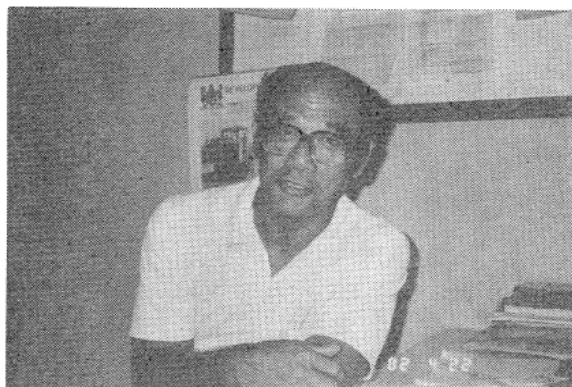


写真3 フィジーの離島ロトゥマ島（ポリネシア系）出身の病理学者サミソニ博士。フィジー医学校がはたす中心的役割が周縁の地域に及ばないことを嘆く。

の人々の最も今日的な問題を文化・政治・経済・技術等あらゆる角度から月刊の形でタイムリーに扱う雑誌 PIM (Pacific Islands Monthly) の比較的新しいバックナンバーを試みに1冊とり出す。すると目につくのは「太平洋のためのテクノロジー」という記事¹⁾、そしてその見出しとしてのスローガンが興味深い——「小さいことは確かに良いことだ、だが発展計画はそれに見合うものでなければ」。この記事を書いたワッデル博士はパプアニューギニア大学で教鞭をとった経験のあるオーストラリアの人で論旨がなかなか鋭い。「小さいことは良いことだ」というキャッチフレーズは故 E. F. シューマッヒャー博士によるもので、どうやら伝統的な世界の賛辞であるらしい。だがワッデル博士はそれだけではよしとせず、機械文明の適切な形での導入が望ましいことを説いている。そのためには2つの事柄が並行して検討されなければならないという。すなわち、1つには従来とは本

質的に異なる「別の発展計画 an alternative development strategy」,そしてもう1つはそれに供するための、やはり従来とは異なる「別のテクノロジー alternative technology」である。そして彼はつけ加える。「このテクノロジーはニーズを出発点として、ニーズにふさわしいものでなければならない」と。さらに具体的に「水」や「エネルギー」の問題に触れているがそれについての紹介はここでは控えよう。

やはり私は強く感じる。絶対的に正しい唯一のテクノロジーの姿はあり得ないのだと。文化一般の問題と同じように、技術の問題も民族・時代・環境によってあるべき姿が少しずつ違っているのが自然なのだ。

こうした問題を实地に即して吟味するフィールドとしては、われわれ日本人としては先ず日本の諸地方があるし、隣人としてのアジア諸国がある。そして、もう1人の隣人オセアニアをも忘れてはならない。人口は少ないが、広大な海域のさまざまな環境でくりひろげられるオセアニアの文化と技術は私たちに多くのことを語りかけてくれるであろう。そして、それよりも、この地域を踏みにじってきた大国の一員として彼らの安寧につながることを実行する義務がある。もちろん、シュヴァイツァー的な押しつけがましい「慈善」としてではなく。

注：(1) WADDELL, Robert (1982).

“Technology for the Pacific :
Small is beautiful — but
development strategies must go
to match”. Pacific Islands
Monthly, June, 1982 : 15—17.